

ナルコ

2007(平成19)年10月31日鑑賞(GAGA 試写室)

★★★



監督＝トリスタン・オリエ／監督・脚本・台詞＝ジル・ルルーシュ／出演＝ギョーム・カネ／ザブー・ブライトマン／ブノワ・ポールヴァルド／ギョーム・ガリエヌ／フランソワ・ベルレアン／ジャン＝ピエール・カッセル／ヴァンサン・ロティエ／レア・ドリュッケール／ジル・ルルーシュ／ Cameo 出演＝ジャン＝クロード・ヴァンダム (バップ、ロングライド 配給／2004年フランス映画／105分)

……「ナルコレプシー」とは、突然眠気の発作が起きるといふ重大な精神疾患だが、夢見る大人のまますきられれば最高……？ 理想の伴侶パムを得た主人公ギュスは、そんな人生を送れるかと思ったが、それは甘い、甘い……。夢の中で見た物語をコミック画に、というアイデアは良かったが、この映画のテーマは著作権争い……？ 「詩的なコメディ」「メランコリックな映画」は、がぜんサスペンスタッチに……。しかして、その結末は……？ たまには、こんな一風変わった映画も面白いのでは……？

ナルコとは……？

この映画を理解するためにはちよっぴり勉強が必要。すなわち、この映画のタイトル『ナルコ』とは「ナルコレプシー」の略。そしてナルコレプシーとは、インターネットのフリー百科事典『ウィキペディア』によれば、「日中において場所や状況を選ばず起きる強い眠気の発作を主な症状とする精神疾患（睡眠障害）」。日本では「居眠り病」「過眠症」とも呼ばれているが、一般への知名度が低いうえ、専門医が非常に少ないという難病。ちなみに、作家の色川武大（阿佐田哲也）がナルコレプシーに罹患しているとのこと。

この映画の主人公ギュス（ギョーム・カネ）は子供の時にこのナルコレプシーに罹患したため、何かと大変。映画では、せっかく彼女といいムードになっても肝心な時にバツタリと倒れて眠りについてしまうため、いつも女の子からバカにされる姿が描

かれるが、そりゃ仕方がないかも……。そんなギユスが、ある日運命的な出会いをした女性がパム（パメラ）（ザブー・ブライトマン）。パムだけはこんなギユスの病気に理解を示し、2人はめでたくゴールイン。まもなく長男も誕生。2人の人生は順調に進むかに思えたが……。

🎬 子供時代はよかったが……

ギユスはなぜか父親の手ひとつで育てられたが、この父親（ジャン＝ピエール・カッセル）が変わり者。彼の生き甲斐は、第1にフランク・シナトラ、第2にハリウッドのB級アクション映画だったから、必然的に息子のギユスもその影響を……。したがって、ギユスがストレスを感じて眠りにおちた時、夢に見るのは兵士、タフガイ、宇宙船に乗る飛行士など、ハリウッド映画の主人公ばり。そうだとすると、必ずしもナルコレプシーという病気は悪いことばかりではなく、むしろ楽しいことのほうが多いのでは……？

たしかに子供時代はそう。しかし、大人になり仕事に就くとなると、途中たびたび居眠りをされたのでは雇い主はたまったものではないのは当然。ピザの販売、遊園地の警備、スーパーの店員その他何をやってもヘマをしでかすため、クビ、クビ、クビの連続。したがって、40年ローンでマイホームを購入したものの、妻のパムが働かなければ自己破産せざるをえないことに……？

これでは、いくら「君のことを愛しているよ」と言いながらギユスがベッドの中でコトを起こそうとしても、パムは「私、疲れているのよ」と拒否。子供時代はよかったが、一家の支柱となるべき大人になれば、ナルコレプシーという病気のやっかひさが身にしみてくることに……。

🎬 ギユスもヘンなら、親友もヘン……？

多くの人々からバカにされるギユスだったが、パムのほかにもう1人ギユスの病気に理解を示した友人が、自称「世界一の空手家」のレニー・バー（ブノワ・ポールヴェールド）。彼が憧れているのは、私が10月13日に観た『ディテクティブ』（06年）に主演していた、スタローン、シュワルツェネッガーに続くニューアクションヒーローであるジャン＝クロード・ヴァンダム。レニーの空手の実力がどれほどなのかは映画を観てのお楽しみだが、子供の心を失わない純真さという点では、ギユスもその父親も、



©2004 LES PRODUCTIONS DU TRÉSOR/STUDIOCANAL/TF1 FILMS PRODUCTION/M6 FILMS

そして親友のレニーもみんな同じ。もっともそれは、みんなそろってヘンという意味かも……？

これは名案、と思ったが……

ギュスは小さい時から絵を描くのが得意。そこである日思いついたのは、自分が夢で見た奇想天外な物語を絵に描くというアイデア。それもコミックとして。ところが、賛成してくれると思ったパムは、「コミックを描いて生計を立てる」などと夢みたいなことを言うギュスをハナからバカにし、ギュスを精神科医のププキン（ギョーム・ガリエヌ）が主催している集団心療セラピーに行かせる始末。

最初は渋々セラピーに通っていたギュスだったが、自分の見た夢をみんなの前で語るとみんな大喜び。とりわけ、ギュスの話の面白さに魅了されたププキンは、その昔漫画家を志していただけに、ギュスの才能に気づき始めていた……。

他方、売れないコメディアンでありながら、人の運勢を見極めることに天才的なカンをもつ男（？）が、ギイ・ベネット（フランソワ・バルレアン）。ある日、ププキンがギュスの留守中パムを通じて手に入れたギュスのコミックを持って、ギイの元を訪れ、コミック成功の確率を尋ねたところ、その答えは……？ そんな中、ププキン

はププキンで、ギイはギイでそれぞれある策略をめぐる始めたが……？

がぜん、サスペンスタッチに……？

この映画を監督したのは、15歳から幼なじみだというトリスタン・オリエとジル・ルルーシュの2人。プレスシートの中で彼らは、この映画のジャンルについて「詩的なコメディ」「メランコリックな映画」と評しているが、前半のコメディ風でどことなくホンワカした雰囲気は、後半に入るとがぜんサスペンスタッチに変わっていくことに……？ それは、ププキンとギイの策略によって、かつてスケートの銀盤を飾っていた双子のツイン・スターが殺し屋(?)として登場してきたため。

ある日、ナルコレプシーの症状によってまちの中を1人さまよっていたギユスは、突如目の前に現れてきた車にはねられて意識不明となり、植物状態に。その間にププキンとギイが着々と進めたのが、ギユスの著作権の奪取。そして台詞が変えられ、作者が変えられて販売されたギユスのコミックは爆発的なベストセラーに。これによってププキンもギイも莫大な利益を手にし、その分け前はパムの手にも……。しかし、これって明確な犯罪行為では……？

目覚めたギユスのとるべき行動は……？

ギユスが昏睡状態を続けている中、さらにひどい出来事が……。それは何と、ギユスの妻パムとギユスの親友レニーが男女の仲になってしまったこと。そりゃ、パムがいつもイライラし、寂しかったことはわかるが、よりによってレニーとそんな関係になるとは……？ もし、ギユスが意識を回復して、そんな事実を知ったとしたら……？ そんな風に思っていると、ジャン＝クロード・ヴァンダムが主演した『ディテクティブ』で、植物状態になった主人公が奇跡的な回復をしたのと同様、『ナルコ』でも、ある日ギユスは奇跡的に目を覚ますことに……。

すると、ここからこの映画は「サスペンスタッチ」の他に、がぜん探偵調が加わってくる。つまりギユスは、バツリと倒れ込んだらパムやレニーがナルコレプシーの症状だと信じ、気を許してしまうことを逆用して、コトの真相を探り始めたわけだ。すると出てくるワ、出てくるワ。そこには、到底信じられないようなギユスに対する裏切り、背信行為の数々が……。さあ、ここでギユスのとるべき行動は……？

🎬 あなたの結末の予想は……？

この映画の結末のつけ方については幾通りものパターンが考えられるが、それはあなたのお好み次第……？ ちなみに、A案は悲劇的結末で、怒り狂ったギユスが妻のパムも親友だったレニーも殺してしまい、さらにププキンやギイにも怒りの鉄槌を下すというパターン。他方B案は、目覚めたギユスの存在がヤバイと悟ったププキンとギイが、再度ツイン・スターに命じて（依頼して）ギユスを消してしまい、結局悪が栄えるという結末にもっていくこと。

現にこの映画では、そんなストーリー展開も……？ ところが、この映画の結末はA案、B案のどちらでもない第3のC案。さて、ジル・ルルーシュが書いたC案の脚本の内容とその結末は……？ ちょっと甘いとは思うものの、やはりフランス映画らしく、少しはおしゃれなものにしなければ……？

2007(平成19)年11月2日記

ミニコラム

日本でも新鋭女性監督に注目！

デンマークの女性監督スサンネ・ピア初のハリウッド進出作『悲しみが乾くまで』（08年）もすばらしい出来だから、その評論をお楽しみに。

女性監督の台頭なら日本も負けてはいない。『殞（もがり）の森』（07年）の河瀬直美と『ゆるる』（06年）の西川美和は別格として、『檸檬のころ』（07年）の岩田ユキ、『赤い文化住宅の初子』（07年）のタナダユキ、『さくらん』（07年）の蜷川実花、『かもめ食堂』（05年）の荻上直子など、新鋭女性監督が次々と。また本書344頁の『Little DJ～小さな恋の物語～』（07

年）が長編監督2作目となる大阪出身の永田琴の今後にも注目したい。

他方、ケータイ小説を映画化して大ヒットした『恋空』（07年）で監督デビューしたのが、テレビ界から進出した今井夏木だが、さてその本格的力量のほどは？

彼女たちは女性監督として一括りにされることを嫌がるようだが、それによって目立つというメリットの方が大きいのでは？ 私はそんな目で、これからも積極的に女性監督特集をやっていきたい。

2008（平成20）年3月6日